

幼児期の自発的行動に関する研究 8

—— 「人へ向かう行動」をめぐる保育の問題 ——

阿部 和子 (聖徳大学 短期大学部)

I. はじめに

子どもの発達を理解は保育の基本であり、本研究は、この保育における基本的課題にアプローチするために、発達を子どもの「自発性」という観点から捉えようとするものである。特に1990年から1996年までは、「自発性一人へ向かう力」に焦点をあてて、0歳から6歳までのその発達の姿の具体像を明らかにすると共に、その自発的な行動を通して育つものについて検討してきた。

そこで、これらの研究の一応のまとめとして、これからの2回にわたり、この「人へ向かう力」が社会化される過程における保育の問題を検討しようとするものである。今回はその1回目にあたり、3歳未満児のそれについて検討することを目的とするものである。

II. 方法

今回の目的である「人へ向かう行動をめぐる保育の問題」を検討するに当たり、1987年に日本教育心理学会(第29回)で発表した「保育者による幼児の自発性の心象」と1990年から1993年に発表された本研究の1から4までに明らかにされた「自発性一人へ向かう行動」において考察された内容を、保育と言う観点から再考察をすることを通して問題を提起する。

III. 考察

1. 自発性一人へ向かう力の背景

(1) 自発性の一応の定義(自発性の定義の①~⑩は資料1当日配布予定)

(2) 保育者の「幼児の自発性の心象」

1987年に発表したものをもとに、保育者の捉えと自発性を年齢を軸に再度整理すると図1、2、3のようになる(資料2図1、2、3参照当日配布予定)。

2. 自発性一人へ向かう力に一からその発達の整理

ここでは、1990年から1993年までに発表した自発性の人へ向かう力を中心に、人へ向かう力の

社会化の過程を再度まとめると表1(資料3参照・当日配布予定)のようになる。

3. 自発性(人へ向かう力)をめぐる保育の問題

資料3「人へ向かう力の発達」と資料2の保育者の自発性の心象の比較をしながら、自発性一人へ向かう行動をめぐる保育の問題を年齢ごと考えていくこととする。

(1) 0歳児(8ヶ月から)

0歳児の「人へ向かう行動」は、人そのものへというより「もの(玩具など)とかかわる経験」を媒介して人へ向かう。これは保育者がこの時期の自発性を「玩具などをいじって黙々と一人で遊び続ける姿」に見ているが、この黙々と一人で遊ぶことと同じように、保育者と一緒に遊ぶ経験も重要になってくる。それは後に、保育者と一緒遊んだ楽しい経験が仲立ちになって「子ども同士のやりもらい遊び(1歳の前半)」が成立してくることからも考えられる。

この時期の保育者の自発性の心象において人へ向かう行動は、主に大人へであり、子どもが子どもへ向かうという行動は、例えば玩具を取るといのようにトラブルの元であり、自発性としては評価されにくいようである。それはもともと保育者は「自発性」を好ましさとして捉えているので、これらの一見マイナスのように見える行動を評価しないのではないかと考えられる。自発性一人へ向かう力ーは、人との関わりを通して方向づけられると考えられるので、この子どもの子どもへ向かう行動もマイナス=避けなければならないこととして関わるばかりではなく、それぞれの子どもの欲求を満たす方向で保育者が関わることで、人へ向かう力の獲得のための豊かな経験となると考えられる。また、人(大人)への行動についても、人見知り自発的な行動として評価されていないが、見知らぬ人を避けるのは、保育者へ向かう行動と考えると人へ向かう行動として考えられる。この人見知りの解消も保育者が欲求をきちんと受けとめることが重要であるが、いつも遊んでいる玩具でいつものように遊ぶことが仲立ちになって、知らない人も泣かないで遊ぶことなどを考えると、保育者と一緒に遊び込んだ経験が、知

らない人への不安を和らげると考えられ「この時期はもの（玩具など）を媒介にして保育者と十分に遊び込む」ことが、子どもを人へ向かわせる経験群となる。

（2）1歳児

1歳の半ば頃に所有意識が芽生え、もの（玩具）に固執するようになる。また、ものを何かに見立てたり、自分でそのつもりになって遊ぶ「みたて・つもり遊び」が出現し、保育者を相手に遊びが展開される一方で、子どもたちでの遊び（やりもらいあそび）が展開する。しかし、所有意識の芽生え、ものに固執し、多くは子ども同士でものを取り合うことが激しくなる。この時期の人へ向かう行動は、ものに対する思い入れ（所有意識）から、ものそのものへ向かい、子ども同士が同じものへ向かったとき、ものを取り合うという形で子ども同士の関わりが起こる。

この時期の自発性を保育者は、図2（配布資料）に見るように、子ども同士の関係というより、これまで保育者にしてもらっていたことを「一人で出来る」ことを、そして、「自分からしようとして」根気よく取り組む（0歳児の時の黙々と遊び込む姿の延長線上にある）ことを自発性としている。そして、人との関係では保育者が用意した活動へ向かう、その活動の準備の間は待つことが出来るなど、「他（保育者）受け入れる」「欲求をコントロールする」ことを自発性と評価していること分かる。

本研究も「しようとする」行動を自発性と捉えるが、好きさという視点を含めて考えないので、要求に固執しものを取り合う姿にも自発性を見るものである。「しようとしたがり」そして、その結果子ども同士がものを取り合うそのことも評価し、そこに保育者がその場面の調整役としてかわり、子どもと一緒に問題解決の方法を探る経験を積み重ねることが重要と考える。その中で、お互いの子どもが、お互いに自身の気持ちに気づいたり、相手の気持ちに気づいたりすることを通して、自他の区別や自身の輪郭を獲得していくと考えるからである。

（3）2歳児

この時期は、さらに所有意識が強くなり、時にものを独占するという姿もしばしば観察される。ものに向かう気持ちを十分に受け入れられて取り組むと、ものに対する思い入れが強くなると考えられるので、ものの独占は、子ども自身の物に向かう気持ちの独占であり、その向かう気持ちに自己が埋没していると考えられると、ものの独占を通して、それへ向かう気持ちを実感しながら、自己（未だその輪郭が曖昧であるが）を十

分に経験していると考えられる。このものを独占することの意味を十分に認識すると、「取り合いはいけない」「独り占めはいけない」と禁止する関わりだけでは不十分であることが分かる。ものを取り合ったり、独占したりすることで周囲（保育者、他の子）とのやりとりがあり、その自分のものに対する気持ちと、周囲のズレから自身の気持ちに気づいたり、自身と異なる他に気づいたりということが、自己の輪郭を明確にしていく経験群となる。そしてそのやりとりの過程で問題解決の仕方など、人との間で自己の要求を実現する方法を獲得していくと考えられる（自発性の社会化）。図3（当日配布資料）で見ると、これらの点は保育者には自発性としては評価されにくいようである。一方、保育者が自発性として評価する「じつくりとものに没頭し、他の類似の経験を応用する」ことなどから、ものの扱い方に習熟したり、ものの性質を知る経験が豊かになり、それを子ども同士で重ねて、「保育者（他の大人も含めて）と遊んだ遊びが土台になって子どもただで遊びが展開し始める」。この子ども同士での楽しさの渦の中の経験は、「他児と一緒にいることの快さ」の獲得のための経験群として位置づけられる。

また、保育者との関係に置いて、「保育者の言うことに喜んで従う」ということも自発性として評価されているが、これは2歳児はその周囲が相当細分化されて捉えることが出来るようになり、ことばの意味がある程度理解でき、その言葉の通りにすることへ向かうということが多く観察され2歳児の特徴的な行動のようである。しかし、この2歳児の行動特徴を「大人の都合の良いように」という方向へ向けるのではなく、この時期を十分に充実すると言う視点から、保育を考えたいものである。保育者が子どもに何を望むかを検討しなければならない時期のようである。

IV. 今後の課題

今回は3歳未満児の自発性一人へ向かうカーの育ちにおける保育の問題を検討した。この問題をめぐる当面の課題は、今回は0歳児については8ヶ月児からの考察であるので、これ以前の「人へ向かう行動」がどのような姿であるのか、そしてそこにおける保育の問題は何か。さらに、3歳児から5歳児までの「人へ向かう行動」を中心にその発達の姿を再整理すると共に、そこにおける自発性をめぐる保育の問題を明らかにすることである。